



日本遺産 藍のふるさと阿波 吉野川市の構成文化財とストーリー

JAPAN HERITAGE

6.山川町諏訪の藍屋敷 7.工藤家住宅を中心とした藍関連文化財群

23.阿波おどり 31.灰汁発酵建藍染 34.川島の浜の地蔵



藍のふるさと阿波 ～日本中を染め上げた至高の青を訪ねて～

令和元年5月、吉野川流域9市町（徳島市、吉野川市、阿波市、美馬市、石井町、北島町、藍住町、板野町、上板町）が共同で申請した「藍のふるさと 阿波 ～日本中を染め上げた至高の青を訪ねて～」が、文化庁の「日本遺産」に認定されました。

認定されたストーリーを構成する36件の文化財（構造物、景観、古文書など）のなかに、吉野川市からは「工藤家住宅を中心とした藍関連文化財群」、「山川町諏訪の藍屋敷」、「阿波おどり」、「灰汁発酵建藍染」、「川島の浜の地蔵」などが含まれています。

ストーリーの概要

古くから日本人の生活に深くかかわり、神秘的なブルーといわれた「藍」。徳島県北部を雄大に流れる吉野川の流域は、藍染料の日本一の産地です。

この地域の平野部に見られる高い石垣と白壁の建物に囲まれた豪農屋敷や脇町の豪華な「うだつ」があがる町並み、「阿波おどり」のリズムからは藍染料の流通を担い、全国を雄飛した藍商人のかつての栄華をうかがい知ることができます。

この地域では、今も藍染料が伝統的な技法で生み出されており、その色彩は人々を魅了し続けています。

吉野川市の藍

徳島県における藍作の起源は中世にさかのぼるとされており、文安2（1445）年の「兵庫北関入船納帳」に藍を積出した船の船籍地として見える惣寺院を川田に比定する説もあります。

江戸時代に入ると阿波の北方といわれる吉野川流域が藍どころとして栄えたことが確実な史料に見ることができます。現在の吉野川市（旧麻植郡、旧板野郡・旧阿波郡の一部）では、ほぼ全域で栽培されており、藍性日本一と称された内原村や麻植塚村では反当りの収穫量が上作で55貫文、辻（平均）で45貫文と県内でも最高水準の収穫量をあげていました。

また、藍の作付け面積がピークを迎えた明治36年には徳島県内で15,100haの藍畑がありましたが、麻植郡に最も多くの藍畑があり、3,247haを占めていました。第2位以下は、板野郡（3,246ha）、美馬郡（2,712ha）、阿波郡（1,879ha）、名西郡（1,807ha）となっています。

このような土地では、多くの藍商も生まれ、享和3（1803）年の関東売仲間には阿波屋勘三郎、藍屋五右衛門がいました。江戸時代晩期から明治・大正時代には川真田市太郎、川真田徳三郎、須見徳平、須見千次郎、石原六郎などの藍商人がいました。

徳島市勢見の金毘羅さんの玉垣には、川真田家の屋号カネマン（万）の印が刻まれています。かつて、藍作で栄えた吉野川市内にも「藍屋敷」が今も残されています。



JAPAN HERITAGE

日本遺産

6.山川町諏訪の藍屋敷 31.灰汁発酵建藍染

山川町地区



諏訪の藍屋敷は、居住されており非公開のため、訪問や問い合わせはやめてください

6.山川町諏訪の藍屋敷



麻植郡(現在の吉野川市)は、江戸時代から明治時代にかけて大藍作地帯で、反当たり収量は県内で最高水準を誇りました。吉野川市山川町の吉野川にほど近い位置に豪農の住宅が残ります。阿波藍の生産量が最盛期となった明治期に建てられた藍屋敷で、主屋を中心に周囲を藍生産のための寝床などの附属施設で囲み、南側に通門(とおりもん)を構えています。吉野川の洪水対策として西側に長大な寝床を配置し、敷地内の建物の地盤を1mほど高くしています。

県内でも最大規模の15間(約30m)の寝床をもっています。2階建てで、太めの木を柱・梁に用いており、重量がかかっても崩れ落ちないように力強い構造になっています。豪壮な屋敷の見事さからは、阿波の繁栄を支えた藍師・藍商人の活躍ぶりをうかがい知ることができます。

非公開のため訪問や問い合わせはやめてください

岩戸神社甕穴

市指定記念物(名勝) 岩戸神社甕穴



岩戸神社境内の岩にはいくつかの石臼のような穴が見られる。これは甕穴というもので、最大ものは直径90cm、深さ1mである。甕穴とは、河床にできたくぼみに入りこんだ礫が渦流によって回転し、時間をかけてその部分を円形に穿ったものである。岩戸神社付近は昔吉野川の河床であったと言われており、この地域の旧地形を考える上で貴重な資料である。また、『麻植郡誌』(麻植郡教育会1922)によると、岩戸神社南にある池は吉野川の旧河道の痕跡とも言われている。

『阿波志』(藤原憲1815)にある「岩門」は、岩戸のことを指すとみられ、その記述によると、甕穴の中に溜まっている水は聖水であり、枯れることも溢れることもなく、人々はこの水を病の治療に使ったということである。甕穴のうち、最も高所にあるものは直径、深さともに35cmで、内部は常に水で満たされているといわれている。

藍作地方特有の氾濫地域であった痕跡がうかがえる。

吉野川の氾濫により甚大な被害を受けたが、その反面、肥沃な土壌がもたらされ、豊富な伏流水に恵まれたため、藍の栽培に適した土地となった。

6.山川町諏訪の藍屋敷 山川地域総合センター(山川支所) 文化財展示コーナー

吉野川市の藍・山川町諏訪の藍屋敷説明パネル



県指定有形民俗文化財 川田手漉和紙製造用具
市指定有形文化財 芳川顕正伯生家の遺品



平成の鹿服調進・製織道具

31.灰汁発酵建藍染

阿波和紙伝統産業会館(藍染め体験)

県指定無形文化財(工芸技術) 阿波手漉き和紙製造の技法
阿波手漉き和紙研修会・紙漉き体験

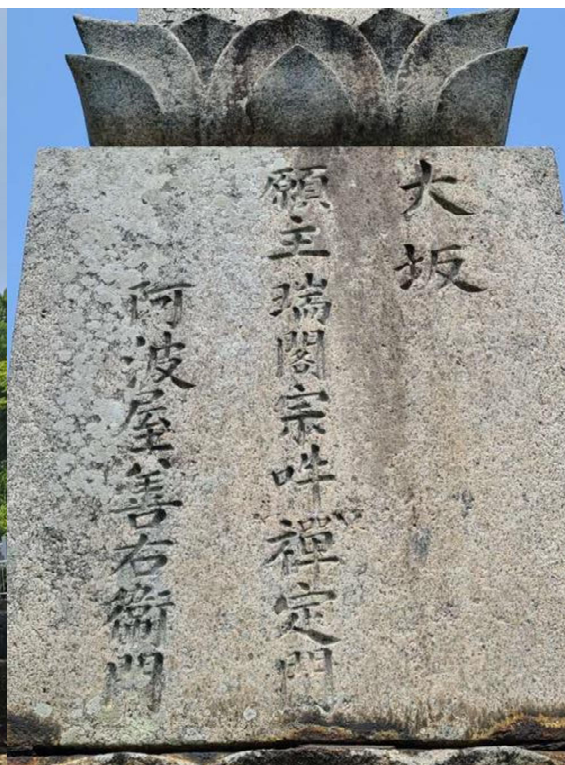


阿波和紙伝統産業会館

藍染め体験・教室
和紙の藍染め



金勝寺 阿波屋善右衛門の供養塔



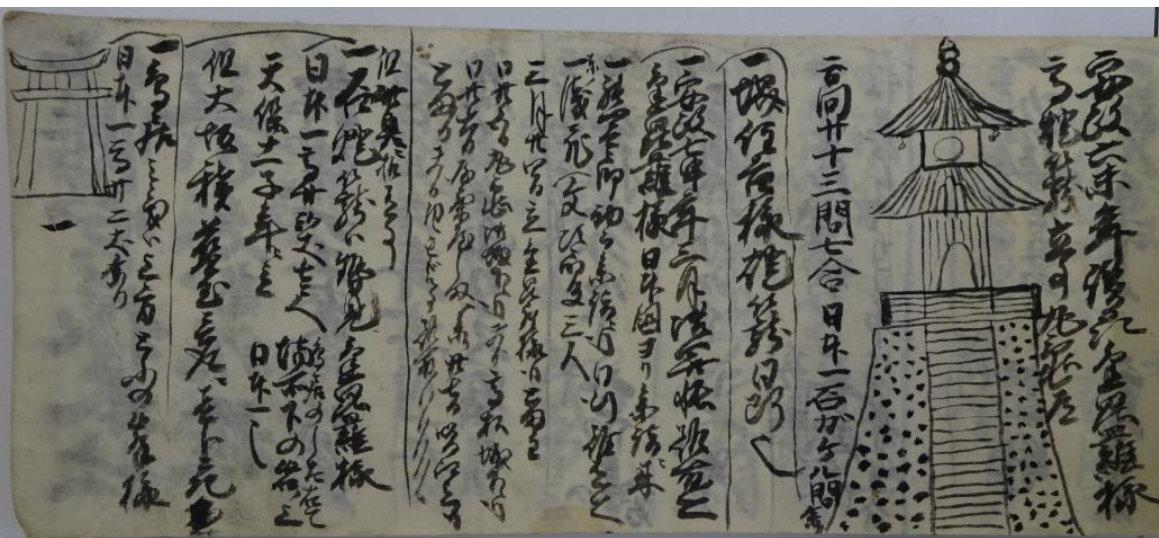
寛政10戊午9月建焉(1798年9月建立)

大坂 願主 瑞閣宗畔禪定門 阿波屋善右衛門

金勝寺の境内南東に建てられた巨大な石塔、阿波屋善右衛門の供養塔である。大坂で藍商を営み、豪商として名声があった善右衛門が最隆盛期に、先祖代々の霊を祀るために建立した石塔である。塔の周囲は、白い壁をめぐらし、いかにも豪商にふさわしいものである。

金勝寺 宗派 真言宗御室派 本尊 阿弥陀如来

御蔵御拝知田畠高物成帳



石灯籠は勢見金比羅様 大坂積藍玉壺丸に壺分宛 堺住吉様燈籠同断也 讃州金比羅様高燈籠立事丸亀道



徳島勢見金比羅様に石灯籠出来仕候 大坂へ藍玉積出俵に壺分懸かりに而立る事

通称、丹兵衛日記と呼ばれており、通い帳式の古記録である。表紙には「御蔵御拝知 田畠高物成帳」と墨書きしてあったようだが、かなり摩滅している。瀬詰村に住む丹兵衛は、2代前に庄屋の上田喜三兵衛家から分家した百姓である。当初は、この帳を田畠高物成帳として使用するために作成したが、相続く吉野川の洪水のために、田畠(畑)を荒らされ、その復旧状況を書くうちに、世間の出来事、家のよろこび事などを書き加え、日記風に記していったものである。

天保7,8(1836,37)年米麦殊之外高値(天保の大飢饉)、藍の取引相場、大塩平八郎の乱、御巡見御奉行のこと、享和元(1801)年吉野川の大水、年貢の減免、嘉永6(1853)年の大ひでり、田畑の復旧開墾、嘉永7(1854)年大地震(安政南海地震)、地券、鳥居の地つき音頭、徳島勢見の金毘羅に日本一の高さの石燈籠と讃州金毘羅に日本一の高さの高燈籠が立ったこと、金毘羅まいり、地元の神社のこと、植痘瘡、高越山での雨ごい、建築の造用、人夫賃、こどもの弓明け、初着、大福嫁、養子のこと、嫁初めて来ること、作物のしつけ方(種のまき方)等々、筆のおこしに目を通して丹兵衛でなければ、書けないと思う数々のものがある。

庄屋、五人組の村役人や僧侶、武士、学者の書いたものは、いろいろ残っているが、百姓が書いたものは県下にもあまりなく、全国的にも珍しい古文書である。昔の厳しい労働の余暇に丹兵衛ほど丹念に書き綴っていた百姓は少ないのではないと思われる。

当時の瀬詰村のできごとや自然災害・文化・風習の他、天保の大飢饉時の米麦藍の取引相場、徳島市勢見の金刀比羅神社に大坂売りの藍商が藍玉1俵出荷するごとに1分ずつかけた資金で石燈籠を建立したことや香川県琴平町の金刀比羅宮に高灯籠が建立されたことなど現代まで伝わっている文化財のほか、徳島藩でも天然痘の予防接種が始まったこと、大坂で起きた大塩平八郎の乱や安政南海地震の徳島県内の被害状況など日本史上の重大な出来事まで記録されており、後世に残すべき大変貴重な史料である。

吉野川市指定有形文化財(古文書)

江川湧水源
環境省選定名水百選: 江川の湧水

西麻植駅
藍商人工藤源助・厩吉が費用負担し開設

鴨島町栗島

鴨島町西麻植

麻名用水

中内神社
藍商人: 工藤源助・ハツ夫

西麻植児童公園
工藤半平
藍屋敷跡地
西麻植会館前石碑
石原六郎: 藍商人、人造
工藤半平: 藍商人、工藤
和田嘉衡: 東京計器(株)

西麻植城主: 工藤甲斐守を祖神

西麻植八幡神社
市指定: 太鼓橋、両部鳥居、備前焼狛犬
未指定: 奉納石碑、御神燈(海上安全)

傷痍軍人徳島療養所(国立徳島病院)
藍商人工藤鷹助が誘致

藍商人:工藤源助・ハツ夫妻が寄進

西麻植児童公園 工藤半平 藍屋敷跡地 西麻植会館前石碑
工藤神社 西麻植城主:工藤甲斐守を祖神 石原六郎 藍商人 人造藍販売、呉郷文庫創設
工藤半平 藍商人 工藤家祖家
和田嘉衡 東京針器(株)創設者

西麻植八幡神社
市指定: 太鼓橋、両部鳥居、備前焼狛犬
未指定: 奉納石碑、御神燈(海上安全)

傷痍軍人徳島療養所(国立徳島病院)
監商人工藤鷹助が誘致

工藤家住宅・須見家住宅は、居住されており非公開のため、訪問や問い合わせはやめてください

7.工藤家住宅を中心とした藍関連文化財群



旧西尾村西麻植地区の工藤家は、
藍師兼藍商人として活躍しました。
風情ある藍屋敷の佇まいからは往
時の隆盛を感じることができます。

明治36年(1903)、大阪で開催された、第5回内国勸業博覧会に藍玉を出品した工藤厩吉は、一等賞に輝き金杯を授与されました。

[illegible]

非公開のため訪問や問い合わせは
やめてください

7.工藤家住宅を中心とした藍関連文化財群

西麻植駅と江川遊園地



工藤家の近くにある西麻植駅は、工藤源助や工藤帋吉（鷹助の父）が費用の大半を負担して開設したものです。工藤鷹助は、西麻植駅の利用者が減少し、廃駅の危機に瀕すると、その存続のために、大衆の憩いの場となる施設の計画を立案しました。そして、所有地2万坪を提供し、昭和6年（1931）に江川遊園地（昭和44年吉野川遊園地に改称、平成23年閉園）を創設しました。

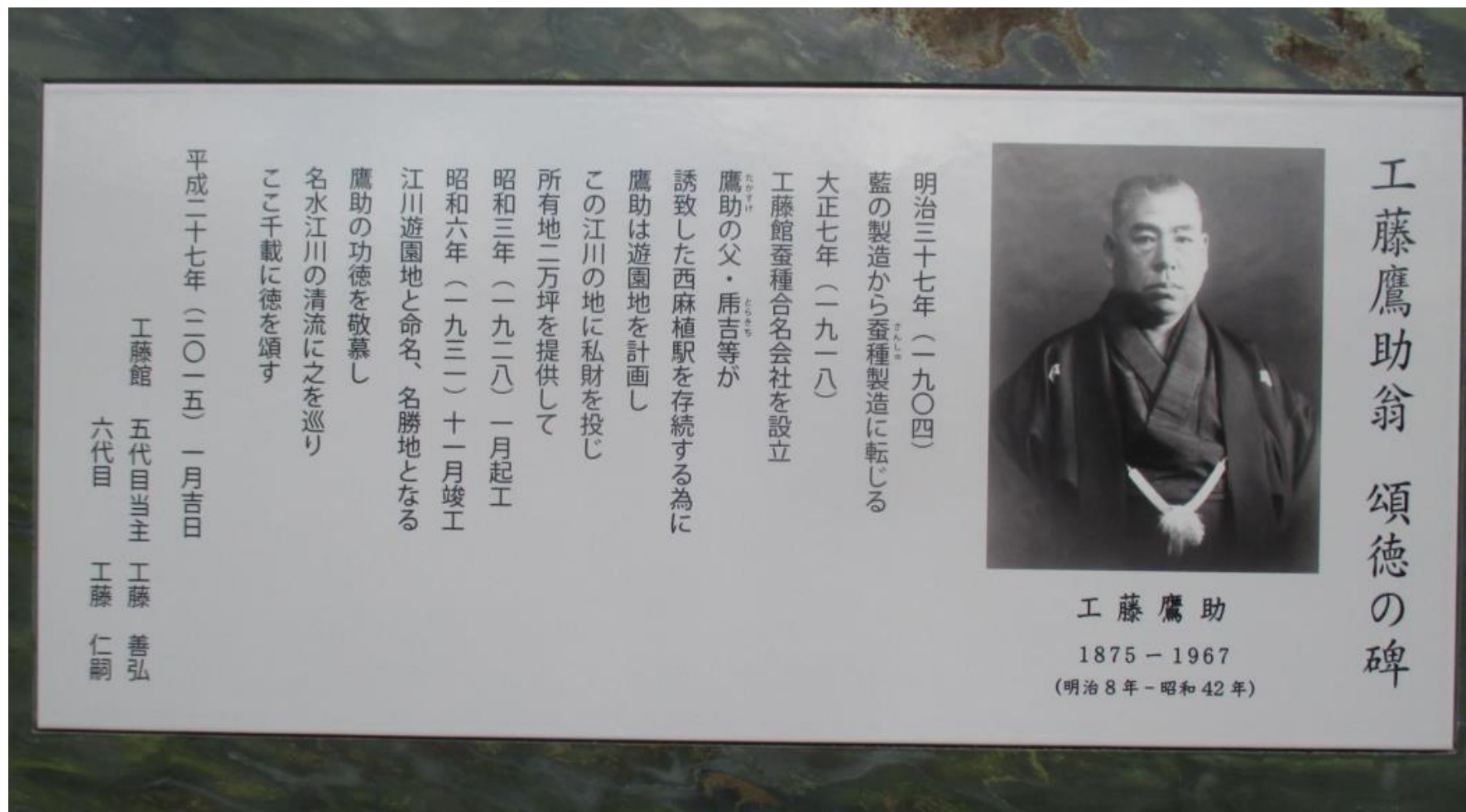
また、吉野川に木橋を架け阿波郡八幡町との交通の便を図り、傷痍軍人徳島療養所（国立徳島病院）も誘致し乗降客増に努めました。



「名水百選の江川」〈鴨島町教育委員会昭和61年4月1日発行〉によれば、私費20数万円を投じて遊園地の造成を行い、昭和60年代の物価に換算すると30億円を超えると記されている。



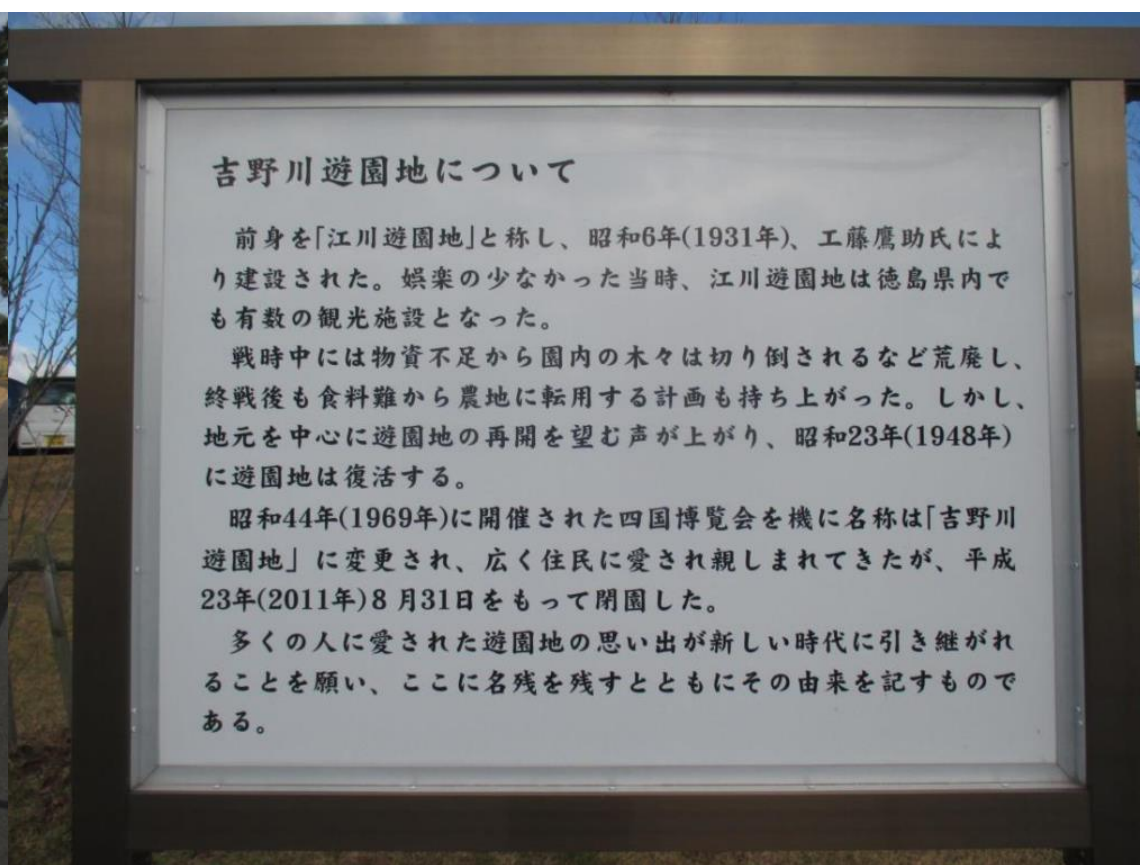
7. 工藤家住宅を中心とした藍関連文化財群 江川遊園地跡 工藤鷹助翁 頌徳の碑



7. 工藤家住宅を中心とした藍関連文化財群

江川遊園地→吉野川遊園地→吉野川医療センター(旧麻植協同病院)

(麻植協同病院→吉野川医療センター: 本カネマン藍屋敷跡地から移転: 結果として藍商人から藍商人の所有地に移転)



7. 工藤家住宅を中心とした藍関連文化財群 江川遊園地

江川遊園地時代は入園無料。

吉野川遊園地になり、遊具が設置されてから、入場料が必要になった。

当初は、現代の遊園地のような遊具はなく、庭園などの名勝であった。

川には鯉を放流し、演芸場や運動場、料亭、食堂、売店も設置されていた。



昭和61年4月1日発行

思い出の江川遊園地



江川遊園地の清流



正門及運動場の一部



桜の堤より池上の美観



桜花咲競う水月亭付近の美観



西橋より水月亭及太鼓橋の遠望



清月亭より太鼓橋の美観



運動場より対岸を望む



古 柳



子供のくに遊戯場付近



大 橋

7. 工藤家住宅を中心とした藍関連文化財群 江川遊園地

春の桜祭り、夏の花火大会、秋には菊人形が催された。

江川会館や催し館では、映画の上映、巡業劇団の公演、浪曲大会や演芸会が催された。

江川会館西側の広場には、野芝居スタイルの舞台が特設され、阿波源之丞座(深見定一氏)による阿波人形浄瑠璃の上演も行われていた。

広場ではサーカス興行などを行い、入園者の増大、西麻植駅の乗降客確保に努めた。

江戸時代に、藍商人が芸事を育てたのと同様に、工藤家は地域の文化や芸事の発展に貢献しました。



思い出のポスター



7.工藤家住宅を中心とした藍関連文化財群 全国名水百選 江川の湧水



全国名水百選 江川の湧水 環境庁選定 昭和60年3月

江川の湧水は、大正5年から始まった吉野川築堤により、江川が閉鎖されたことによる。徳島県指定天然記念物 江川の水温異常現象
それまでは、吉野川の一部であり本流の時代もあり、藍作地方特有の氾濫地域であった。藍玉などの荷物を運ぶ運河の役割も果たしていた。

7. 工藤家住宅を中心とした藍関連文化財群

西麻植八幡神社

西麻植八幡神社は、正保・慶安(1644～52)の頃、敷地の河辺八幡宮の分霊を受け小祠が建てられたことによる。

西麻植八幡神社の本殿玉垣には工藤源助、工藤帋吉、工藤和喜太、麻植松太郎などの藍商人の名が見られます。その他、奉納石碑や御神燈などにも地元の藍商人の名が見え、**工藤家をはじめとする藍師・藍商人がこの地域の発展に大きく貢献していることが分かります。**

玉垣 奉納石碑



7. 工藤家住宅を中心とした藍関連文化財群 西麻植八幡神社

吉野川市指定有形文化財 太鼓橋 両部鳥居 備前焼狛犬

吉野川市の有形文化財に指定されている西麻植八幡神社の備前焼の狛犬や太鼓橋、両部鳥居も地元の有力な藍商人から寄進されたものです。

天明3(1783)年、願主多田門吾重利、多田永之助重正の名が刻まれている。



藍商の河野一族により寄進されたと伝えられており、明治元年以前に建てられたと考えられている。

備前焼の本場、岡山県の伊部の窯元、森嘉太郎中節が焼いたものである。天保5(1834)年8月29日、藍商の阿波屋半兵衛により寄進された。

藍商人が各地と交流があったことがうかがえる。



7.工藤家住宅を中心とした藍関連文化財群

西麻植八幡神社 御神燈

文政五年壬午(1822) 願主 新田與右衛門

西麻植字新田の藍師・藍商と伝えられている。

川島神社(川島城跡)にも同じものがある。

西麻植八幡神社入り口の御神燈



内陸の神社で、海に関係する氏子の存在は考えられない。
海上安全を願う必要がない。川であれば水上安全と考えられる。
このことから、海の安全は藍玉の輸送しかないと考えられるため、
藍商人が藍玉輸送の安全を願い寄進したと考えられる。

海上安全の文字



西麻植会館前石碑 石原六郎 工藤半平
南隣の旧西尾村役場跡から移設



石原六郎石碑
藍商人
人造藍販売
呉郷文庫(図書館創設)
大正4(1915)年

和田嘉衡石碑
東京計器(株)創設者

工藤半平石碑
藍商人
工藤家祖家



藍商人 工藤半平 藍屋敷跡地

西麻植城(大木累) → 藍屋敷 → 西麻植児童公園

工藤家先祖は伊豆国出身で、西麻植村に領地を拝し、西麻植城に代々居住してきた。
その後、工藤半平氏の藍屋敷となり、祖家断絶により現在は西麻植児童公園となっている。



正工藤家墓誌

元祖工藤左衛門尉祐経は、伊豆の国住人て鎌倉幕府開府時には、源頼朝に仕えていた。富士すその
お狩りの際に曾我兄弟の仇討ちにあい没した。
戦国時代のなか頃、子孫の工藤甲斐守左衛門尉祐重が四国管領に仕えて西麻植村で
領地を采地しこれを領した。後、此の村に移る。工藤家代々の城で西麻植城に住まいし、事ある時
には敷地の山崎城に立てこもって戦った。天正十年長曾我部氏の攻略にあつて落城した。その城跡
は、中筋の工藤半平氏邸宅で現在は吉野川市の児童公園になっている。東側に城主甲斐守
を祀った工藤神社がある。

西麻植城・山崎城城主

祖家正

工藤甲斐守左衛門尉祐重…左衛門尉祐清…総次郎吉兼…嘉兵衛…平左衛門…
治左衛門…平左衛門…儀七郎…善作…要兵衛…正五郎…半平…正平(絶家)

先祖正

新家工藤左衛門尉萬三郎…忠義…和雄…俊夫…

祖家十五代・先祖四代目 俊夫

建立 平成三十年七月吉日

工藤神社 西麻植城主 工藤甲斐守を祀る 工藤半平 工藤源助 工藤帛吉 他多数の工藤家子孫が寄進

工藤半平氏の藍屋敷跡(西麻植城跡)の市道を挟み東側に鎮座する。大正13(1924)年10月10日建立。発起人:工藤半平氏。



延喜式内社 中内神社

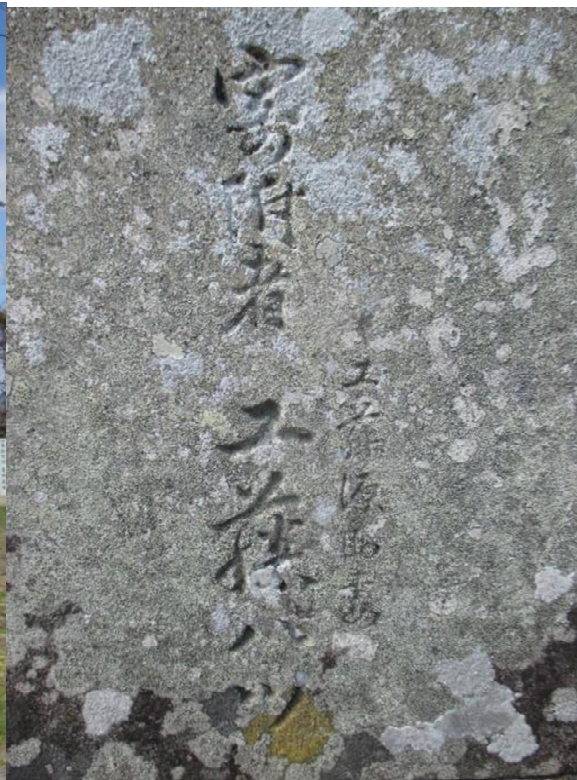
藍商人 工藤源助 ハツ 夫妻が寄進

康保4(967)年より施行された延喜式に記された神を祀る神社である。

長い間祭祀ができない状況であったため、大正3(1914)年10月13日に藍商人工藤源助・ハツ夫妻が寄進し、
建立されたが、昭和南海地震により全壊したため、祭祀の遂行に必要な本殿と幣殿のみ改築されていた。

令和3(2021)年3月吉日に、拝殿の改築工事が竣工した。

境内には、源助・ハツ夫妻の名が刻まれた石碑や鳥居、狛犬が残されている。



須見千次郎(角) 藍商人 国会議員 吉野川市指定有形文化財(古文書)

須見家藍大市賞牌板

旧西尾村敷地地区の藍師・藍商人として活躍した須見家に、徳島城下で開かれた藍大市から、優れた藍玉を出品した証として贈られた賞牌板(金看板)(安政3年(1856)〈江戸時代後期〉～明治29年(1896))である。

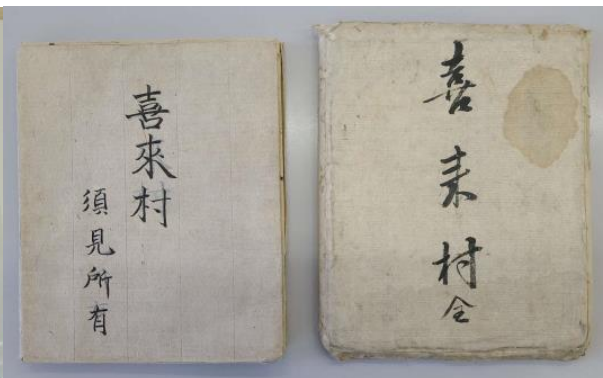
非公開のため訪問や問い合わせはやめてください



木製の賞牌板に、瑞一(日本随一【江戸後期】、日本瑞一【明治】)、准一、天上の3等級の文字や、取引相場(金拾銭に付、拾参匁(もんめ)換など)、荷主・売主に「徳兵衛、須見徳平、須見千次郎、須見忠次郎」、買主に「森六郎、三木與吉郎、坂東安一などの徳島の藍商人、大阪藍會社、大阪仲買、東京売組合」、藍仲買に「新居庄平など」、須見家の屋号「八角」(やまかく)、商標「泰平親玉」(たいへいおやだま)、金龍玉(きんりゅうだま)、良藍親玉(りょうあいおやだま)が墨書き、または刻印され、金色に文字が着色されている。



須見千次郎(角) 藍商人 国会議員 喜来村全図



西尾村敷地地区で藍師兼藍商人として活躍した、須見家(【角:やまかく】須見千次郎氏(衆議院議員))が所有していた喜来村の全図である。

須見家所有の藍畑を管理するために使用していた地図であり、須見家が所有していた土地は、**赤色長方形■の印**で塗られている。縮尺が1600分の1の実測図である。大きさは縦77cm、横106cmで、和紙に黒色で地番や土地の区画を、凡例に則って、郡界線が黒太力ギ線、村界線が黒太線、字界線が黒破線、筆界線が黒細線、道が赤線、河川、川原、川成地、堤、社地、寺、墓地が地目ごとに色づけされている。また、現在と同様の地番が記載されている。

江川南岸堤防(番外地番、明治5(1872)年に**藍商人の川真田市太郎氏【本万】本カネマン5代目【衆議院議員】**が提唱し、徳島刑務所の囚人を動員して川島町～牛島村まで築堤、旧11ヶ町村を守る)が記載されているが、江川の川原を埋め立てて造成した甲地番(南岸)・乙地番(北岸)(昭和21(1946)年7月登記:現在の吉野川高校付近)が記載されていない。

江川の北側と東側上部に、麻植郡と阿波郡の郡界線 **ㄣ** が引かれている。

当時の知恵島は阿波郡に属し、昭和32(1957)年に鴨島町に編入されるまで、阿波郡柿島村大字知恵島であった。喜来村は、明治22(1889)年の市町村制発足時には鴨島村に含まれ、鴨島村大字喜来となっている。

明治32(1899)年に開通した徳島鉄道(鴨島―徳島間)が記載されていない。

以上のことから、明治5～22(1872～89)年までに作成された地図であると推定される。

かつては藍商人が広大な土地を所有し藍畑が広がっていた時代から、養蚕・製糸業に転換していき、世界遺産富岡製糸場を経営していた片倉製糸紡績工業(株)の巨大な工場が立地し、その後衰退撤退。現在は市街化区域となり開発が進み、住宅団地となったこの地域の、かつての土地利用の変遷を知る上で貴重な資料である。

その後、須見家より鴨島町役場に寄贈され、現在は吉野川市教育委員会生涯学習課で保管している。

吉野川市指定有形文化財(古文書)

所有者:吉野川市

吉野川市教育委員会生涯学習課で保管。

藍作地方特有の氾濫地帯の土地利用

スイートコーン畑「甘々娘」吉野川市ふるさと納税人気NO.1返礼品



出荷量日本一（徳島県）の春ニンジン畑



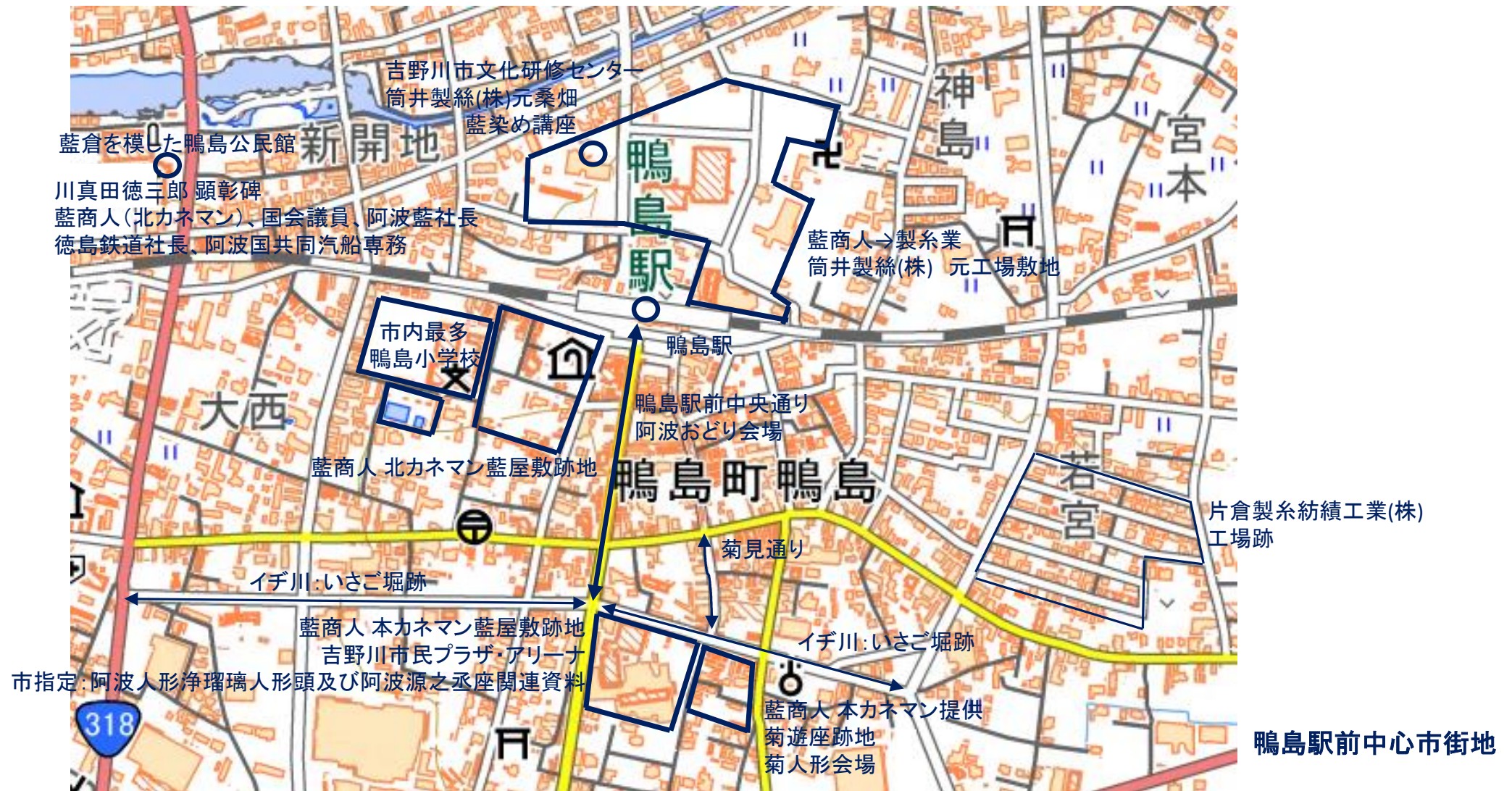
吉野川市鴨島町知恵島（外間（そとま）と呼ばれている吉野川河川敷内の畑）

良質な藍づくりの鍵は、雄大な吉野川にある。日本三大暴れ川の一つである「四国三郎」吉野川は、たびたび氾濫し、流域は甚大な被害を受けた。その反面、洪水によって肥沃な土壌がもたらされ、豊富な伏流水にも恵まれたため、「阿波の北方」は、藍の栽培に適した土地となった。

かつては、あたり一面藍畑だった阿波の北方の景色も、時代とともに変化しつつある。藍作の衰退後、養蚕業が盛んになり多くの畑が桑畑に変わったが、**現在では出荷量日本一を誇る春ニンジンやスイートコーン「甘々娘」の他、野沢菜等、有数の園芸作物地帯となった。**

吉野川～江川流域のかつての藍作地方特有の氾濫地帯では、特に柔らかくて甘い春ニンジンや、特に糖度が高くて甘いスイートコーン「甘々娘」が育つことで知られ、現在も吉野川の恩恵を受けている姿を見ることができる。

23.阿波おどり 31.灰汁発酵建藍染



明治初期～中期頃の鴨島駅前中心市街地 中心市街地は形成されてない

郡境線
阿波郡知恵島村と
麻植郡鴨島村境

鴨島公民館
鴨島第一中学校
運動場
(灰色:川原)

鴨島小学校

西郷墓地

鴨島八幡神社

鴨島乙地番(灰色:川原)

鴨島甲地番(水色:江川)

鴨島番外地番(黄色:堤防)
藍商人(本カネマン5代目)川真田市太郎が提唱(明治5年)
江川南岸堤防(明治6(1873年築堤)
川島町～喜来村牛島村境まで築堤

吉野川市文化研修センター

鴨島駅

銀座通り

旭通り

伊予街道・県道

イヂ川・いさご堀跡(水色:川)

吉野川市民プラザ
(本カネマン藍屋敷跡:鴨島城跡)

鉄道が開通していないため、
鴨島駅前に中心市街地が
形成されていない。
大きな畑となっている。

銀座通り沿いは畑である。

伊予街道沿いと旭通り沿い
に宅地が集中している。

鴨島村全図 明治5～22(1872～89)年頃作製

23.阿波おどり



鴨島駅前中央通り

阿波藍の販売で莫大な富を得た藍商人は、徳島の花柳界での型破りな豪遊でお座敷芸として踊られていた阿波踊りを洗練した踊りにし、また、藍商人の大坂市場への進出は上方文化の交流を促し、阿波おどりのリズムに影響を与えたと言われています。

阿波おどりは徳島の歴史と風土が育んだ郷土芸能です。

毎年8月14～16日の間、鴨島駅前中央通りに演舞場が開設され、阿波おどりが実施されている。

鴨島駅前中央通りは、藍商の本・北カネマン家が社長を務める徳島鉄道(株)が開設した鴨島駅から本カネマン(市民プラザ)に直結する幹線道路でもある。

現在の鴨島駅前中心市街地の中心となる都市計画道路である。

川真田市太郎(初代)(市兵衛)(5代日本^万) 国会議員 阿波国共同汽船社長・徳島鉄道社長
川真田徳三郎(2代) (2代目北^万) 国会議員 阿波国共同汽船専務・徳島鉄道社長
徳島市勢見の金比羅さんの玉垣 ^万(カネマン) 藍商人 阿波藍社長

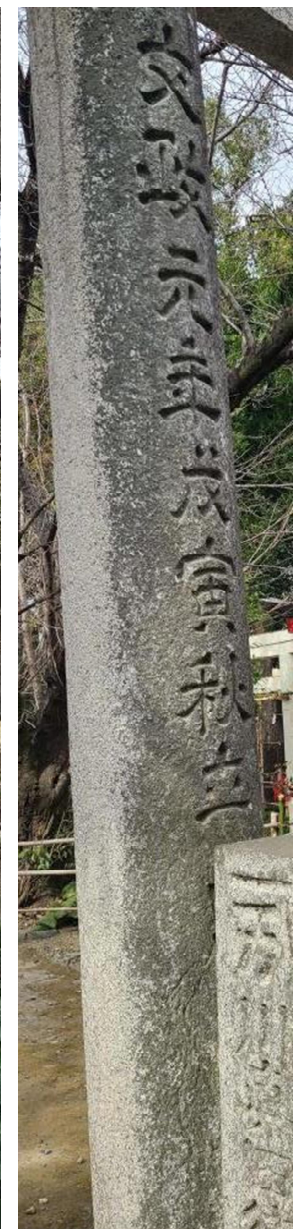
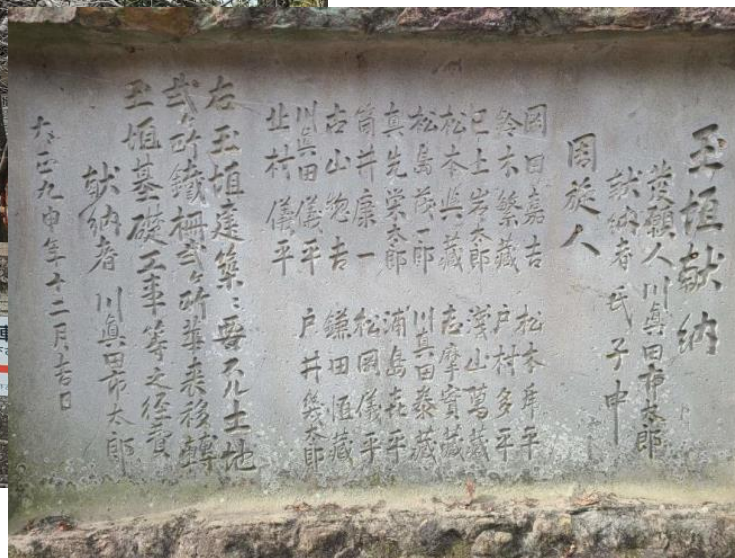
本カネマンは、嘉永年間(1848～55)に徳島船場町に肥料問屋を開業、明治33(1900)年には阿波農工銀行(5代市太郎)を設立、船場の本カネマンの店で営業。
阿波藍(株)(大阪北堀江)(2代徳三郎→5,6,7代市太郎)→阿波商事(株)(7代市太郎)(化学薬品商社、軍需資材の生産集荷、韓国～中国～東南アジア～太平洋諸国に拠点)、
電灯会社(5代市太郎)や日本製飴(株)(6代市太郎)も設立した。



徳島鉄道(2代徳三郎): 鴨島駅【藍屋敷前】～徳島駅【藍場浜(倉庫)・船場(店舗)】～小松島駅【港: 阿波国共同汽船乗り場】を繋ぎ、藍や人を運んだ。
やがて鴨島駅前に中心市街地が形成され、古代中世の先進地であった森藤、飯尾、敷地、川島を抜き、現在の吉野川市の礎となった。

鴨島八幡神社

玉垣 南側(左) 本カネマン 川真田市太郎:6代目本カネマン:市太郎2代目
大正9年 北側(右) 北カネマン 川真田徳三郎:3代目北カネマン:徳三郎3代目



文政元年(1818)戊寅秋立 ○
発願主摂州大坂 川真田○○

大正9(1920)年に施工された玉垣で字が隠れて、発願主の名前を確認できない。

本カネマン川真田家は1790年頃に創業し、江戸時代から大坂に店を構えていたと伝えられており、1818年の時点で大坂に拠点を持っていたことがうかがえる。

川真田市太郎(本万) 本カネマン 藍屋敷 川真田徳三郎(北万) 北カネマン 藍屋敷

本家、分家の両藍屋敷とも、市内で最大の児童数を誇る小学校、鴨島小学校の敷地より広い敷地を有していた。

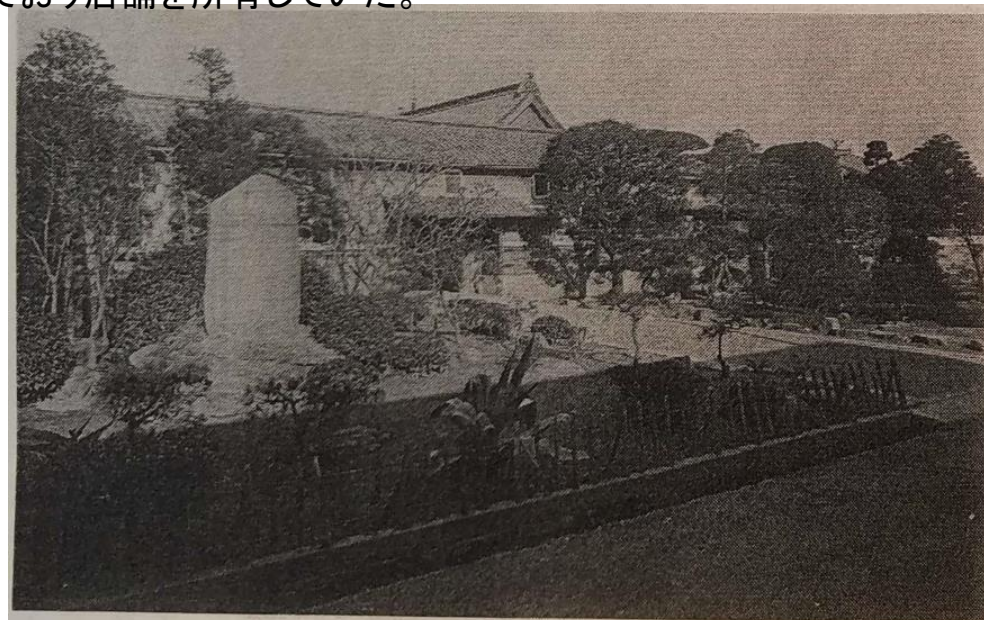
また、鴨島駅前中心市街地の大多数の土地は、両カネマン家が所有していた。

両カネマン家は、鴨島の藍屋敷の他に、徳島市船場にも進出しており店舗を所有していた。



昭和6年当時の川真田市太郎氏の豪壮な本邸

本カネマン藍屋敷跡地(鴨島城跡)の東側に、菊遊座を備えた菊人形の会場(現ハローワークの西側)が設営されていた。



昭和6年当時の川真田合資会社(川真田徳三郎邸)

安政2(1855)年、三代目金五郎の子、徳三郎が分家独立し、藍商「北カネマン」を創業した。屋敷手前左に2代目徳三郎の石碑。

カネマンは初代金五郎が寛保(1741)の頃に、真田系川真田氏「ふるま」から分家独立して成立し、三代目金五郎が寛政年間(1790)頃に板野郡七條村の七條氏より養嗣子として入家に際し、萬屋カネマン印(売場行藍師株)を持参し、藍商「カネマン」を創業した。藍商としては後発であった。以来両家は、5世代130年間、常に表裏一体、ある時は幼き本家を北が後見し、ある時はその逆となり、互いに支える関係であった。

川真田市太郎(本万)本カネマン 藍屋敷跡地 鴨島城→本万→麻植協同病院→吉野川市民プラザ・アリーナ



鴨島城は、細川、三好時代に存在した、城というよりは砦であった。
最後の城主鴨島六之進は三好氏に属し、土佐より侵攻した長宗我部氏との戦いで脇城外で戦死し、以降廃城となった。
蜂須賀氏が入国して以降、真田系川真田氏「古政(ふるま)」(庄屋)が成立し、その後、寛保(1741)の頃に初代金五郎が「ふるま」から分家して本カネマンが成立し、経緯は不詳であるが居住してきた。

令和2年4月1日オープン 県内最大級のアリーナ

北側の東西に延びる都市計画道路は、元々は鴨島城のお堀である「イデ川:いさご堀」が流れていたが、昭和30年頃の市街地整備で埋め立てられた。吉野川の古流の痕跡と言われている。

雨水対策整備が完了する平成の初め頃までは、大雨の度に道路が川になっていた。

都市計画道路の歩道は、市民プラザが整備されるまでは、浸水対策のため一段高くなっていた。



敷地自体も、一番高いところで、東側市道より約1m20cm高くなっている。
藍作地方特有の氾濫地域であった痕跡がうかがえる。

阿波人形浄瑠璃人形頭及び阿波源之丞座関連資料

吉野川民プラザ 本万 本カネマン 藍屋敷跡地

吉野川市指定有形民俗文化財



阿波源之丞座(げんのじょうざ)、深見巴龍(はりよう)・小巴龍(こはりよう)父子が阿波人形浄瑠璃の上演に用いた、人形頭(初代天狗久・天狗弁作)・人形本体・衣装・見台・丸本・床本・鼓・拍子木と興業ポスターである。

若い頃から浄瑠璃に夢中であった深見定一(さだいち)氏(鴨島町飯尾)は、県下義太夫名人の一人として知られていた近所に住む高橋巴龍(本名嘉平)に弟子入り、第一の門弟として二代目巴龍を襲名した。阿波の伝統芸能である人形浄瑠璃の衰退を憂いていた定一氏は、せめて一座でも人形座を残したいとの思いから、昭和13年(1938)、廃業した三好郡の笹山金太夫一座を買取り、これを記念して鴨島の菊遊座(現在の吉野川市民プラザ東隣)で5日間の興行を座主として取り仕切りした。その後も木偶(でこ)を買い求め、座名も「本家阿波源之丞座」と改め、昭和21年(1946)には、わずか16歳の子息利實(としざね)氏(小巴龍)が父に代わり座主となり、昭和23・24年(1948・49)には一座を率いて「四国路春の巡業」を行うなど県内外で活動している。昭和25年(1950)の天皇来県の際には徳島市の歌舞伎座での人形浄瑠璃公演に協力し、副知事から感謝状が授与された。父子2代で立ち上げ、引き継いだ阿波源之丞座であるが、昭和31年(1956)の大阪産経会館ホールでの興行を最後に一座としての活動は終了した。

菊遊座を備えた菊人形会場は本カネマン(6代目市太郎)が所有地を提供し、本カネマン藍屋敷(市民プラザ)東側に開設されていた。

川真田家は地域の文化や芸事の発展に貢献しました。

鴨島大菊人形 菊遊座と菊人形会場

本万 本カネマン藍屋敷跡地(市民プラザ)東隣(現ハローワークの西側)



藍商から製糸業に転換した筒井製絲(株)の工場前に、大正14(1925)年の秋に「鴨島菊人形」の旗を見たのが菊人形のはじめである。

実業家筒井嘉太郎氏(筒井製絲(株)創業者直太郎氏の叔父)が鴨島菊遊会を組織し、昭和2(1927)年に本カネマン6代目川真田市太郎氏2代目市太郎から2千坪の土地の提供を受け、本カネマン藍屋敷(市民プラザ)東隣の広い畑(現ハローワークの西側)に、菊遊座を備えた会場を開設し、菊人形、四国菊花品評会が開催された。昭和16(1941)年に大戦で中止したとなったが戦後復活、有楽座S24～34→有楽園S35～40→江川遊園地S41～43→菊人形休止→(菊花展)鴨島駅前S49～50→筒井製絲(株)南前S51→(菊人形再開)鴨島駅前駐車場S52～H7→吉野川市役所前広場H8～と変遷して現在に至っている。

菊遊座では阿波源之丞座による「阿波人形浄瑠璃」も上演されていた。藍商人は地域の文化や芸事の発展に貢献しました。

川真田徳三郎君碑(北万) 2代目北カネマン 2代目徳三郎 鴨島公民館東側 国道318号歩道沿い公園



万延元(1860)年2月、藍商の家(北カネマン)の2代目徳三郎として生まれた。

明治18(1885)年、県議会議員をふりだしに政界入りし、明治23(1890)年の第1回衆議院議員に30歳の若さであげられ、連続7回、計9回当選した。

実業界では、本家の本カネマン5代目川真田市太郎(市兵衛)氏と協力して阿波藍製販の改善や、明治20(1887)年には阿波国共同汽船(株)を興し、明治31(1898)年には阿波藍(株)を大阪北堀江に設立し、初代社長となり、阿波藍の大阪売の大多数を取り扱った。

明治32(1899)年には、徳三郎の取り纏めで阿波藍製造販売同業組合が結成され5代目川真田市太郎(市兵衛)氏とともにその首脳となった。

最も大きな功績は、明治32(1899)年に徳島鉄道(株)を設立し、社長となり、鴨島駅【藍屋敷前(工場)】から徳島駅【藍場浜(倉庫)・船場(店舗)】まで鉄道を敷いたことである。後に小松島駅【阿波国共同汽船乗り場:(港)】まで敷設した。

大正7(1918)年11月に、58歳で逝去された。

この功績は、松方侯爵、芳川顕正伯爵(川田村出身・東京府知事・各大臣を歴任・漢詩家)による碑文(漢詩)として残されている。

この石碑は、元々は藍屋敷に建立されていたが、後に鴨島公園の中央に移設され、平成4(1992)年に公園の再整備を行った際に、現在地に移設された。

大正8(1919)年11月建立

藍蔵を模した建築物 鴨島公民館(旧鴨島町中央公民館)



鴨島公園内に建設された、藍蔵を模した地上5階建て615席の大ホールを擁する公民館である。

建設当時はホールの席数は744席であったが、改修により615席に減少した。

最高裁判所や警視庁本部庁舎等を設計した著名な建築家、岡田新一氏の設計により建てられた。

タイルや壁面には藍色や水色が採用されている他、改修前のホールの座席は水色であり、藍らしく青を基調とした色彩が採用されていた。

建設当時(昭和50年代前半)は、町内には大小多数の藍屋敷が残っており、また、藍染料造りに関わっていた方が多数存命しており、藍染料を造っていた歴史や文化が語り継がれていたことを裏付ける資料でもある。

また、藍屋敷や藍蔵が次々に失われつつあり、藍で栄えた痕跡を後世に残さなければならないという強い危機感や思いが込められ、このデザインが採用されたと考えられる。

1979(昭和54)年9月定礎

1980(昭和55)年2月開館

令和の時代まで残った藍蔵

31.灰汁発酵建藍染

吉野川市文化研修センター



藍染め講座



市民の文化の健全な発展と福祉の向上を図るために設置されました。1989(平成元)年4月開館。

文化研修センターの敷地は、元々は藍商から製糸業に転換して成功した筒井製絲(株)が所有していた工場敷地や桑畑でありました。文化研修センターでは、平成30年に藍染め講座を休止しておりましたが、藍のふるさと阿波のストーリーが日本遺産に認定されたのを機に、令和3年5月から藍染め講座が復活しました。

鴨島駅やホテルにも近いことから、観光客を対象とした体験講座も展開していきたいと考えております。

曾我廼家五九郎直筆の書 吉野川市指定有形文化財(歴史資料)

曾我廼家五九郎(本名:武智故平)は、明治9(1876)年4月に麻植郡上下島村の藍農家、父武智亀之助と母ミヤの長男として生まれた。武智家は明治21(1888)年の吉野川大洪水で家が流され全財産を失い、親たちは北海道に移住した。

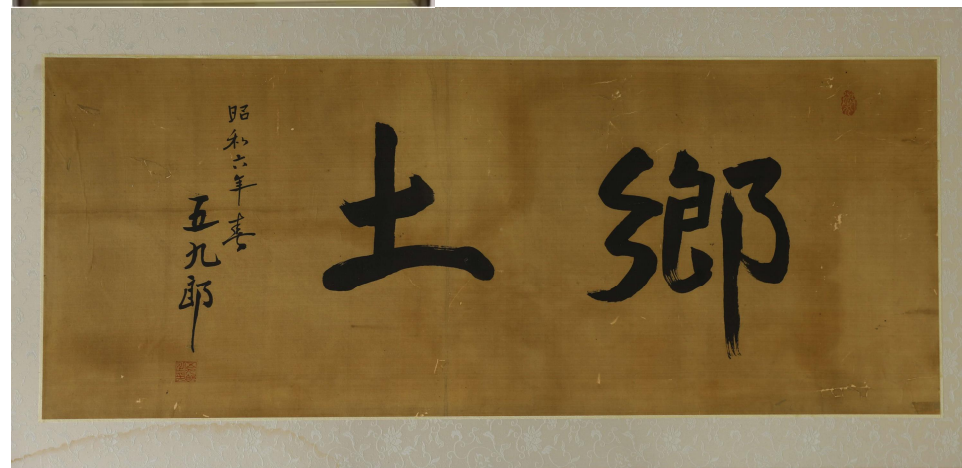
少年時代は政治家になるのが夢で、14歳の時に上京し自由民権運動の板垣退助に入門して壮士仲間にも入り、舞台から運動を庶民に広めようと一座に加った。明治35(1902)年、大阪に行き曾我廼家五郎十郎一座に参加して喜劇俳優となり、明治43(1910)年9月、再度上京し、浅草六区の金龍館で曾我廼家五九郎として旗をあげ、喜劇俳優としての地位をかため人気を博した。五九郎の演ずる喜劇は社会悪を嫌い、これを風刺し観客の共感と呼び、常に涙と笑いを誘い、大正末期、映画や演劇で有名となった「ノンキナトウサン」の主演となって全国的喝采を博した。日本演劇史上に小さな体格で大きな足跡を残したと言われている。

昭和15(1940)年7月、64歳の生涯を病のため終えた。

昭和46(1971)年5月に曾我廼家五九郎建碑会が組織され、JR鴨島駅前に「ノンキナトウサンの碑」が建立された。この石碑に刻まれている「郷土」の文字は、五九郎直筆の書から写刻したものである。また、東京浅草公園にも昭和38(1963)年にノンキナトウサンの碑が建立されている。

昭和47(1972)年6月29、30日に第1回目の五九郎市(後の五九郎まつり)が開催され、五九郎の至芸を讃え、33回忌法要を行ったのを記念して始まった。五九郎の徳を讃えると共に日々「ごくろうさん」と人々に感謝の気持ちを伝えようという運動として行われている。

昭和53(1978)年には、町民みんなが楽しく歌い踊る中に、ふるさとづくりの心情と意欲の盛り上がりを図るために、鴨島町教育委員会が五九郎音頭を選定し、演歌歌手大川栄策氏の歌唱によるレコードも制作され、五九郎まつりでは鴨島町婦人会による五九郎音頭が披露されるようになり、まつりに花を添えている。



直筆の書「郷土」の他、映画や演劇で有名となった「ノンキナトウサン」役の自画像である。

書には全て五九郎の名が墨書きされ同じ落款印が押印されている。

34.川島の浜の地蔵



34.川島の浜の地蔵

吉野川市指定有形民俗文化財

藍栽培が盛んな洪水地帯において、慰霊や道標、また洪水への警鐘のために地元の藍豪農や藍商人等が寄進した高地蔵である。



川島字城山の岩の鼻展望台の下西側の吉野川に面した麓、川島の浜(川湊)に立つ、川島の浜の地蔵である。

吉野川流域に点在する台座が高い地蔵は、暴れ川の洪水遺産であり、中流部の低平地に多く集まっており、土地が低く被害が大きかったと思われる場所ほど台座が高くなっている。台座が高い地蔵は、洪水から地蔵尊の像を守ろうとする先人たちの信仰心によって生まれたが、それだけではなく、身近な地蔵に供花・供物を捧げ祀ることにより、毎日の暮らしの中で洪水の恐ろしさを忘れることなく、水防への心構えと水の危険性を子々孫々に伝承してきた無形の民俗文化でもある。

川島の浜の地蔵は周辺の地面の高さから基礎部分を含めて台座高が2m67cmあり、吉野川流域の台座が高い地蔵のなかでは第3位である。殿様巡視の際、台座が余りにも高すぎるため一つを外してしまったという伝説が残っている。

吉野川に溺死した人々の冥福を祈って供養のため、天保14年(1843)4月に建立され、以来、川湊に出入りする船の安全を見守ってきた。川島の浜は、吉野川が湾曲しているため、水が出る度に上流から被災者の亡骸が流れついたと伝えられている。川遊びをする子どもの事故も多かったが、「浜の地蔵」として親しまれて人々の信仰を集めるようになってからは、付近の水難事故はなくなったと伝えられている。

古くから、毎年8月24日の縁日には、ムシロを敷き百万遍の数珠を繰り地蔵をお祀りしており、遠近の人々が参詣するので夜市も立ち、灯籠流しも行われる盛況で、大戦中こそ夜市は中断のやむなきに至ったが、数珠繰りと灯籠流しは中断することなく、毎年盛大に行われ、時には浪曲の余興や花火の催しさもあるほどで、昭和50年(1975)代頃からは尺玉や二尺玉と呼ばれる県内でも最大級の花火が打ち上げられるようになり、地方の一名物となっていた。(花火大会は2004年を最後に終了した。)

台座には、三界萬霊(過・現・未の関係者の霊を祀る碑という意味、供養塔と同じ)と題して、銘文が刻まれている。

また、台座には願主として、後藤田、阿部、中村、中、川村、大島姓など、川島の有力な藍師・藍商だった姓と同じものが刻まれており、川島の浜は川島の藍師が徳島の藍市に藍玉を運ぶため船に積み込みをしていた地で、吉野川の川湊として栄えていたことから、藍玉を運ぶ船の安全を願い設置されたとも考えられている。

堤防とダムが造られ、洪水が以前のように度々起こらなくなった現代でも、8月24日には地蔵をお祀りしている。

34.川島の浜の地蔵 吉野川市指定有形民俗文化財

台座に大島源左衛門の名 仁木竹吉(北海道仁木町開拓者)の父

北海道へ藍作の地を求め、北海道余市郡仁木町を開拓した仁木竹吉の父、大島源左衛門の名が発願者(寄進者)の一人として台座の正面に刻まれている。右から3人目。地蔵が建立されたのは天保14(1843)年4月。

竹吉は天保5(1834)年麻植郡児島村(児島塚・善入寺島)の小高取(武士待遇)大島源左衛門の7男として生まれた。(稲田家御家中筋目書による、諸説あり、戸籍は一部誤りと推定) 嘉永6(1853)年大島家から美馬郡拝原村の仁木大蔵家の仁木伊兵衛のもとへ養子に入ることが許可となっている。(稲田家御家中筋目書) ※小高取(武士待遇) 同書第5巻索引に、「児島塚居住 仁木大蔵小家 仁木竹吉」とあり、養子に入ったが拝原村には居住せず、稲田家臣仁木大蔵家の別棟として児島村に居住していた。

屋敷跡は市立学校給食センター北側付近の児島塚・善入寺島にあったと伝えられている。

仁木家は代々、稲田家(徳島藩家老)の家臣で藍製造を業としていた。慶応2(1866)年には徳島藩の藍製取締方に任ぜられた。

明治7(1874)年の吉野川の水害に苦しむ流域の農民の窮状、惨状を救済するために、渡道を決意した。

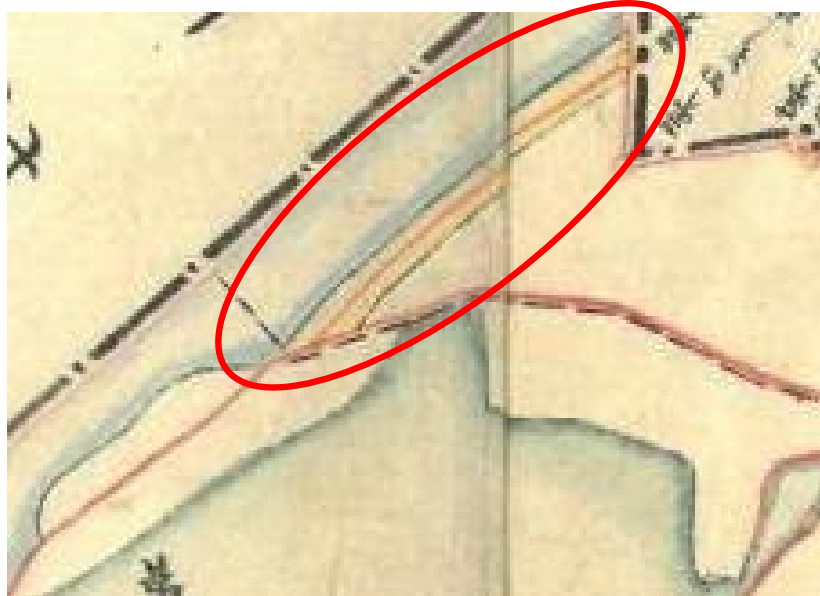
明治8(1875)年1月に郡長に「北海道渡航二付御添翰願」を提出し、3月に北海道へ向かい、旧主である稲田家の移住地、静内から道内を視察した。北海道でも藍草の生育が可能であることを確信し、開拓使へ「北海道藍・煙・菽麦拡張論」を建言し、明治9(1876)年1月に種子の取り寄せを誓願した。

明治12(1879)年5月に「殖民二付願」を開拓使に出し、余市郡への殖民計画と移民団の創設に着手した。

同年12月5日に仁木村と村名設置の儀が出され、明治13(1880)年3月6日に仁木村の設置が布告となった。

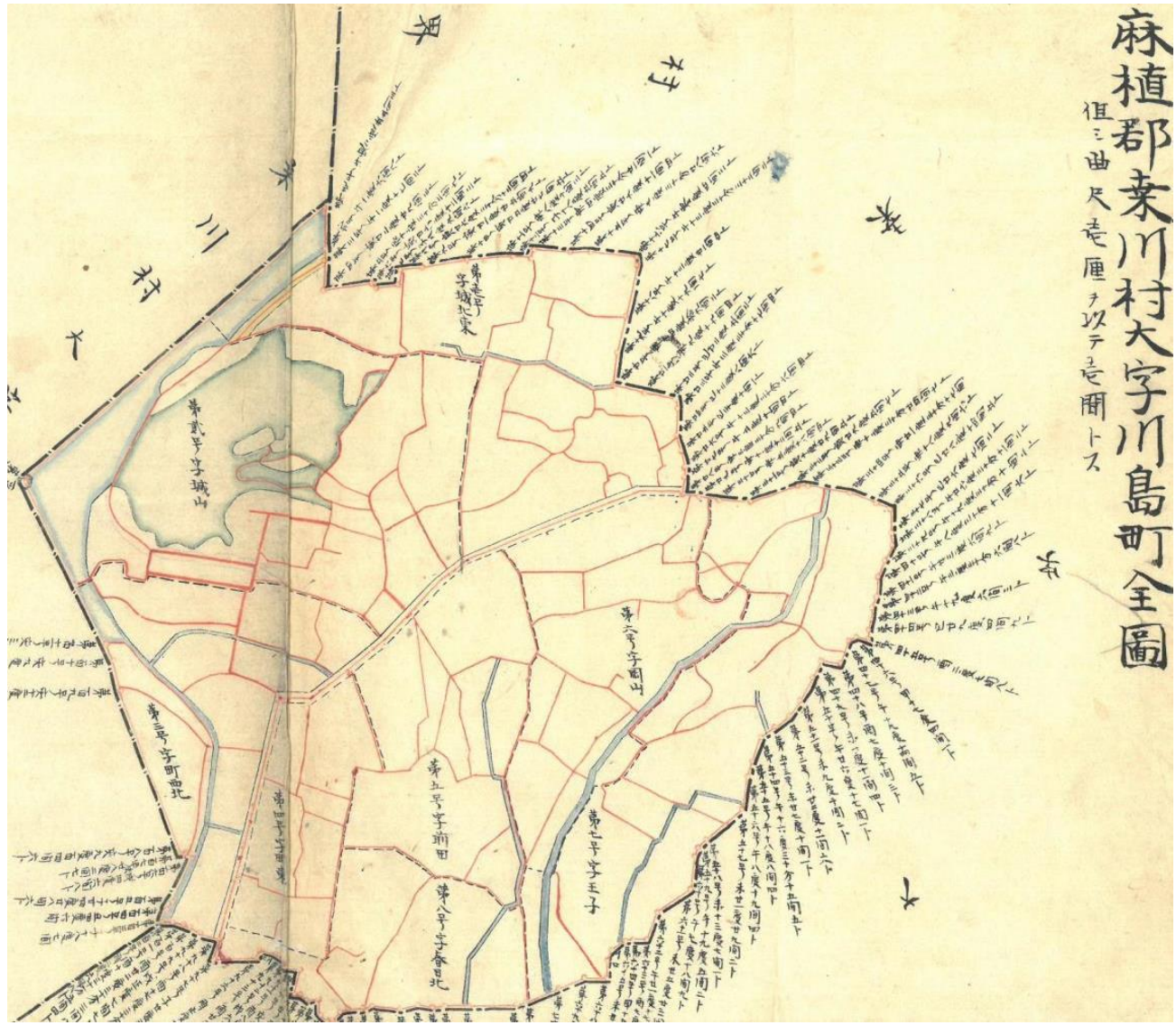


藍商人 川真田市太郎 本万(本カネマン)の提唱で築堤した江川南岸堤防



拡大図 堤防が黄色に着色されている。
堤防上に赤線の道も記載されている。

江川南岸堤防は明治5(1872)年に藍商人の川真田市太郎氏【本万: 本カネマン5代目】(衆議院議員)が提唱し、明治6(1873)年から徳島刑務所の囚人を動員して川島町～喜来村と牛島村境まで築堤され、旧11ヶ町村を守りました。
明治22～44(1889～1911)年頃に作成された、麻植郡桑川村大字川島町全図にも、古城山の北側の吉野川との境界から東へ、堤防が築堤されているのが黄色で記載されています。
その後、大正5(1916)年から始まった、吉野川南岸堤防築堤事業により増強され、現在は、川島～江川湧水源付近までは、吉野川南岸堤防になっています。



川島古城山(川島城址) 川島公園 岩の鼻展望台 善入寺島(栗島)

吉野川市指定文化財 史跡 川島城址(城山全体)
川島城(復元)

写真の川島城はS56年築で城自体は文化財に指定されていません
耐震基準を満たしていないため閉館中



岩の鼻展望台からの風景
川島の浜 市指定:川島の浜の地蔵
善入寺島(栗島)(日本最大の川中島)
善入寺島(栗島)1916(大正5)年まで506戸3000人が住んでいた



川島古城山(川島城址) 川島公園 遊具広場(曲輪跡) 善入寺島(栗島) 川島潜水橋

吉野川市指定文化財 史跡 川島城址(城山全体)
川島公園遊具広場(曲輪跡)からの風景
吉野川 川島潜水橋
善入寺島(栗島)(日本最大の川中島)

善入寺島(栗島)には1916(大正5)年まで506戸3000人が住んでいた。

川島潜水橋は日本最大の川中島である善入寺島(栗島)に架かる潜水橋である。

日本遺産に認定されている「四国遍路」、四国霊場第10番札所切幡寺から第11番札所藤井寺を結ぶ遍路道でもあり、多くのお遍路さんが歩いている。

毎年5月には「最後まで残った空海の道ウォーク(平地コース)」が開催され、約500人の参加者がウォークを楽しんでいる。

中世に、古城山を中心に発展した郷町「川島町」は、南麓に伊予街道、北麓に川島の浜(川湊)が近接し、水陸ともに交通の要衝であった。この交通の要衝を支配するため、近接する岩山(古城山)に川島城が築城されたと考えられている。



川島古城山(川島城址) 川島神社(二の丸跡)

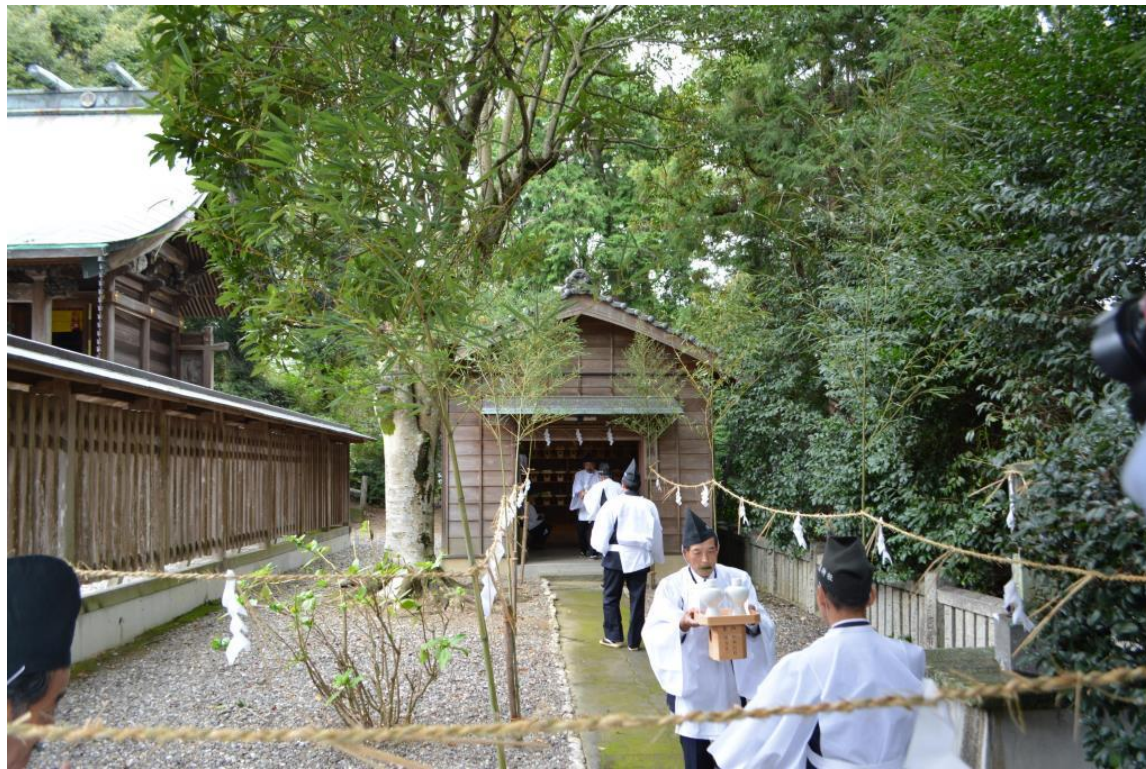
吉野川市指定天然記念物 川島神社のイブキ



樹周は2.83m、幹は地上から高さ2m付近で多数分枝して伸びている。県内では3番目の太さである。樹齢や由来は不明であるが、川島神社が1916(大正5)年にこの地に座する以前よりあるといわれている。

川島神社入り口の御神燈 海上安全の文字

吉野川市指定無形民俗文化財 七十五膳の神事



川島神社で秋の例大祭の儀式の後に行われる神事である。七十五膳という名称は、神饌をたくさん用意して75台の三方にお供えすることによる。祭事は10月の第4日曜日に行われている。

川島神社は1916(大正5)年10月20日に吉野川改修工事により社地移転を余儀なくされた浮島八幡宮を中心として旧川島町内の多くの神社を合祀してできた神社である。

川島古城山(川島城址) 川島神社(二の丸跡) 御神燈



川島神社入り口の御神燈

海上安全の文字

文政五年壬午(1822)

願主 新田與右衛門

西麻植字新田の藍師・藍商と伝えられている。

海上安全・家運長久と彫られている。

善入寺島(栗島)にあった浮島八幡宮から移設したと伝えられている。

西麻植八幡神社にも同じものがある。

内陸の神社で、海に関係する氏子の存在は考えられない。海上安全を願う必要がない。川であれば水上安全である。このことから、海の安全は藍玉の輸送と考えられるため、藍商人が藍玉輸送の安全を願い寄進したと考えられる。





北海道仁木町の開拓者 北海道へ藍作の地を求めた 仁木竹吉(児島村【児島塚・善入寺島】の小高取(武士待遇)藍師・豪農の家出身)

天保5(1834)年麻植郡児島村(児島塚・善入寺島)の小高取(武士待遇)、大島源左衛門の7男として生まれた。(稲田家御家中筋目書による、諸説あり、戸籍は一部誤りと推定)
嘉永6(1853)年大島家から美馬郡拝原村の仁木大蔵家の仁木伊兵衛のもとへ養子に入ることが許可となっている。(稲田家御家中筋目書) ※小高取(武士待遇)
同書第5巻索引に、「児島塚居住 仁木大蔵小家 仁木竹吉」とあり、養子に入ったが拝原村には居住せず、稲田家臣仁木大蔵家の別棟として児島村に居住していた。
屋敷跡は市立学校給食センター北側付近の児島塚(栗島・善入寺島)にあったと伝えられている。※塚は中州の島という意味。栗島・善入寺島をさす。
仁木家は代々、稲田家(徳島藩家老)の家臣で藍製造を業としていた。青年期に達して家業である藍製造を受け継ぎ、慶応2(1866)年には徳島藩の藍製取締方に任ぜられた。竹吉が北海道で藍の栽培を熱心に取り組むのもこうした事情による。

明治7(1874)年の吉野川の水害に苦しむ流域の農民の窮状、惨状を救済するために、渡道を決意した。

明治8(1875)年1月に麻植・阿波郡長に「北海道渡航二付御添翰願」を提出し、3月に北海道へ向かい、旧主である稲田家の移住地、静内から道内を視察した。
この視察を通じて、北海道でも藍草、煙草、豆類、麦類の生育が可能なことを確信し、開拓使へ「北海道藍・煙・菽麦拡張論」を建言し、明治9(1876)年1月に種子の取り寄せを誓願した。

竹吉が渡道後、もっとも主力を注いでいたのは藍栽培であった。滞在していた静内では明治9(1876)年から製藍を開始し、10(1877)年に藍玉が生産されていた。
竹吉は10(1877)年7月に大阪へ出張し、朝陽館主の五代友厚より、インド製藍の伝授を受けていた。朝陽館は薩摩藩出身の政商であり、関西の実業界の巨頭であった五代友厚が、輸出を目的に9(1876)年創設した製藍会社である。

明治12(1879)年5月に「殖民二付願」を開拓使に出し、余市郡への殖民計画と移民団の創設に着手した。

余市郡が選定されたのは、静内に比べ余市川流域にまとまった未開地が存在したこと、しかも同地は余市川の恩恵を受けた肥沃な土地であったこと、さらには河口には鯨漁場で栄える余市があつて藍作の肥料に必要な鯨粕の入手に至便であったことによるものと推定されている。

同年12月5日に仁木村と村名設置の儀が出され、明治13(1880)年3月6日に仁木村の設置が布告となった。

出典：新仁木町史

明治15(1883)年6月に開拓使へ瀬棚原野の450万坪の貸付を誓願し、10月に移住をはたして「竹吉村」を創設した。

明治19(1887)年に渡道して倶知安原野を発見し、21(1889)年3月に同原野に150万坪の貸付を出願していたが、果たされなかった。

大正4(1915)年8月31日に死去し、後半生を北海道の開拓にささげた84歳の生涯であった。

仁木村での藍作については、

開墾当初の明治13(1880)年には、全耕地の10%にあたる3.5町作付けされた。

明治16(1883)年には、全耕地の60%にあたる50町に一挙に拡大した。

明治31(1898)年には、全耕地の21%にあたる150町に拡大したが、

明治33(1900)年を境にインド藍やドイツの化学染料が輸入されるようになり、急激に衰退した。



仁木村の藍畑(明治末)
(北海道大学附属図書館蔵)



仁木竹吉碑(仁木神社)

参考文献

かきしま 柿島村誌	昭和36(1961)年5月5日	柿島村誌刊行会 発行
鴨島町誌	昭和39(1964)年3月31日	鴨島町教育委員会 発行
山川町の文化財	昭和46(1971)年1月15日	山川町教育委員会 発行
川島町史	昭和54(1979)年3月31日	川島町 発行
日本農業全集30	昭和57(1884)年12月25日	社団法人農山漁村文化協会 発行
かもじま町の歴史とゆたかな文化財	昭和59(1884)年3月1日	鴨島町教育委員会 発行
名水百選の江川	昭和61(1986)年4月1日	鴨島町教育委員会 発行
ふるさと読本 あゝ鴨島	昭和62(1987)年10月1日	鴨島ふるさと研究会 発行
かもじまの民俗	平成元(1989)年12月25日	鴨島町教育委員会 発行
藍の豪商－経営戦略と盛衰－	平成3(1991)年8月21日	徳島新聞社 発行
俱知安町百年史	平成5(1993)年3月30日	俱知安町 発行
新仁木町史	平成12(2000)年3月30日	仁木町 発行
吉野川市の文化財	平成30(2018)年3月31日	吉野川市教育委員会 発行
藍商の足跡残る 西麻植八幡神社	平成30(2018)年1月吉日	西麻植八幡神社総代会 発行
延喜式内社 西麻植中内神社	令和3(2021)年3月吉日	西麻植四神社総代会 発行
日本遺産ストーリーブック 藍のふるさと 阿波	令和3(2021)年3月	藍のふるさと阿波魅力発信協議会 発行

執筆者

吉野川市教育委員会 生涯学習課 課長補佐兼文化振興係長 大島 祥人

藍のふるさと阿波 吉野川市の構成文化財

第4版改訂 令和6年10月1日 発行
編集 吉野川市教育委員会 生涯学習課
発行 吉野川市教育委員会